

サギソウの花

今井 百合江子

「滅びゆく美にひかれ」と題した新聞記事の切り抜きが目にとまりました。

埼玉の人―木村なほさん―サギ草研究家。夏、直径二センチほどのこまやかな花をつけるサギ草（ラン科）。色の白さ、花の舞い上がるシラサギを思わせるその可憐さに魅せられて、いつの間にか生態研究の専門家になった。ダイニングキッチンの一 corner に研究資料が山と積み、主婦業

と混然一体。「もう十数年前になりますか。滅びゆく野の草サギ草の保護運動に加わったのがきっかけでした。この花の美しさは造花の神の快心作だと思つた。寒冷地を除いて全国的に湿原に群生していたといわれるのに、いま自生地は絶滅に近いのです。」旧東京女高師で幼児教育を専攻、生来の花好きと探究心が相まってサギ草に傾倒、云々。

彼女自身は自著の中でサギ草との出会を次の様に記している。「昭和三十八年、当時都立神代植物園在職の山田菊雄氏らにより国土開発の蔭でサギソウを救わんと鶯草保育会が設立され、ゆくりなくこの会に参加したのがサギソウと私の出会でした。」この出会が彼女の平凡な日々を変えた事は確かです。彼女は自分のことを「サギ狂」と呼んでいます。まさに、花に憑かれた人生とでも云いたい程の熱の入れようでした。専業主婦の彼女が何時の間にか「鶯草保育会」の有力メンバーとなり、今では日本産サギソウの殆どがその狭い庭に集まって来ました。野生種保存の仕事が彼女の肩にかかって来ました。

最近、高まる自然指向の風潮の中で、この花も多くの愛好者を得、絶滅を免がれたようですが、野生地ではな

お減少の一途を辿って居ると聞きます。と云うのも、前述の様に、將に白鷺そのものの楚々とした花形と微かな香り（程度によりますが）とにひかれて、密かに持ち去る人が跡を絶たない故の様です。他方土地開発による湿原の荒廃も故なしとは申せません。明治の初め頃までは東京都内にもこの花が見られたとか。世田谷区はこの花を区花に指定して居ります。同区には奥沢・代沢・北沢等「沢」のつく町名が現在も多く残って居りますが、恐らく其処には清水が湧き清流がせせらぎ、夏なお涼しい緑蔭や、草原が広がって居たのでしょう。サギソウの様な湿原を好む野生植物の生存にはこのような環境が必要でした。この花を惜しんで校章に制定した学校もあります。^{註四}目黒区立八中がそうです。同校校歌の作詞者佐藤春夫は、一番、四番の歌詞の中にそれぞれこの花を頌って居ります。

(一)君は聞かずやむさし野の、碑衾あたり伝へ云ふ、信義に生きし白鷺の形見と咲ける野の花ぞ、云々。

(四)聞けや清しき多摩の流れ、白鷺の花咲く中に、云々

昨秋次のような葉書が筆者に届きました。「御無沙汰しています。先生お変わりもないでしょうか。サト（末

娘）はおかげで結婚し、いよいよよさぎ草と、とり残された私の晩年がはじまるようになっています」（原文）純白のウエディングドレスに包まれて、幸福そのものように微笑んで居る花嫁姿の郷子さんの写真の下方に、なほさんの心境が小さく書かれてありました。娘二人を嫁がせて静かな生活に足を踏み入れた母親の心が痛い程滲んで居りました。子育てを終えた安堵と、一抹の淋しさの中に、けれどサギソウと生きるゆとりを得た女の幸せが筆者の胸にしみ透りました。

女学生の彼女を教えた日日から何時の間にか四十年が過ぎました。私も亦職を退き独りの晩年を迎えることになりましたが、さて、なほさんにとつてのサギソウの様な確かな何かが私には得られたのだろうか、ふと思うこの頃です。

註一 読売新聞埼玉版21頁 昭和55年2月27日抜粋

註二 昭和二十二年三月東京女子高等師範学校保育科卒

註三 『サギソウの観察と栽培 森なほ著』ニューサイエンス社グリーンブックス

註四 鷺草保育会機関誌第四号昭和42年3月1日発行



（森）花
写